

チャンネル、動画を検索

LIVE

黒髪ロング見た目だけ清楚系

むちむちド変態お嬢様の

オナニー配信日記

著: CROW  
絵: 島根の野良犬

▶ ◀ ⏪ ⏩ ⏴ ⏵

## 一章 お嬢様のどすけべオナニー配信

「……あー、テストテスト。大丈夫でしょうか、映ってますでしょうか……声は聞こえていますか？ 聞こえてる。よし、みなさまこんばんは。しばらく仕事が忙しくて配信をする暇がなく、連続配信記録が途絶えてしまいました。申し訳ありません。

……では、はじめましての方、私のことを忘れてしまった方もいらっしやると思うので、まずは自己紹介をしようと思います。

私のことはしおりと呼んでください。歳は24歳、会社員をしています。性別は、女性。見たらわかりますよね、えへ……

スリーサイズは上から98、62、87です。会社では「体にばかり栄養が行って肝心の頭はスカスカね」って言われたりしています。上司にはすれ違いざまに胸やお尻とかをじっくり見られて、仕事のこと呼び出されるときも、遅くまで丁寧な指導を受けてぼーっとしちゃうと「聞いているのか」って丸めた紙でおっぱいを叩かれたり……この前は手でつかまれましたね。

なんでこんなに大きくなっちゃったんでしょう。重いし、夏は蒸れるし。喜ぶのは男の人だけじゃないですか。『喜んでもらえるのを見てたら自分もうれしくならないか？』と言われても……相手によりますよ。配信でコメントを下さる皆様や、今はいませんが恋人……そういう

特定の人になら気分もよくなりますが。会社の……これ以上はやめておきますねえ。人の悪口は必ず本人の耳に入るものだ、とお父様から教えられてますので……」

乳首の浮いたシャツにショーツ、マスクの薄着でカメラの前に座るスケベな体をした女の名前は、丹田詩織。自己紹介の通り、会社員をしているが、仕事のストレス解消でいわゆる大人向けの動画配信もしている。

「では、今日もいつも通り初めていきます。皆様どうぞ、私の配信を楽しんでみてくださいね」

——コレをはじめたのは、今年の春ごろだったと思います。話が過去に飛びますが……私  
がなぜコレにハマったのか、その理由を語りますので、どうかお付き合いください。

おそらく、それなりに裕福な家庭に生まれた私は子供のころから厳しく育てられ、小中高と一貫校で学問を学び、大学へ進学する際に家を出て一人暮らしをはじめました。

家を出た理由は、家族には社会勉強のためとそれらしいことを言いましたが、本当のところは年頃にありがちな束縛からの解放を求めたからです。

おそらく、お父様もお母様もわかっていたのでしよう。私が未っ子なのもあり、特に反対もせず許可してもらえました。

ただ、一言「男性と付き合うのは好きにすればいい。ただし、子供を作る前に必ず相手の方を連れてくるように。行為はすればいいが、避妊はしっかりするんだぞ」

「相手はしっかり選ぶのよ。お父さんみたいな節操なしが相手だと苦労するから……でも、詩織がしっかり選んだ人なら私は反対しないわ」とだけ。

それからは、家の持ち物件の一つの、大学近くにあるマンションで一人暮らしを始めました。最初はタクシーで通学していましたが、新しくできた友人に、ふつうはその距離なら自転車か徒歩で通うでしょ、と驚かれましたね。

彼女には一般常識というものをたくさん教えてもらい、とても楽しく、そして助かりました。世の中にはクレジットカードが使えないお店があること、電車の乗り方、一食にかけるお金は基本千円以下だとか。本当にいろいろ。

彼女の言葉を借りると「庶民の遊び」というのも教えてもらいましたね。カラオケや、スイーツ巡り……お見合い……ではなく合コン。

どれもこれも馴染みがなくて、とても新鮮な経験で興奮しました。世の中にはこんな楽しいことがあるのか、と。

特に合コンというものでは、初めて男性に交際を申し込まれました。はしたないとは思いますが、そのときは初めての合コン、初めてのお酒、初めての男性からのアプローチ……たくさんののはじめてに少々……いえ、大変舞い上がってしまい、そのまま二人で抜け出して、連れられていかれた先はホテルでした。

その日まで私知らなかったのですが、ホテルには旅行やビジネスで宿泊するためのもの以外にも、男女の逢瀬のためのものと、二種類あったんですね。

そして、その夜に、家族以外の方に、初めて唇を許して、はじめて裸体をさらして、ほかにも口では言えないような多くの「はじめて」を経験しました。

いくつもの「はじめて」を経験して、お酒も入っていてつい忘れそうになっていたのですが、直前に思い出して避妊だけはお願ひして……そこから先は、ちょっと痛かったことと、大変気持ちよくしていただいたことしか思い出せません。

これが私の初体験。後から知ったのですが、避妊具をつけていても絶対に妊娠しないわけではないのですね。ということ、これ以降は彼の言っていた「本番」はお互いのことをもっと深く知って、両親に挨拶をしてからでないとダメです！ と。でもそれ以外のことなら、と言うと、お口で……その、男性の、おちんちんを啜えて、なめたり、キスしたり、吸ったり、喉の奥まで深く飲み込んだり。

ほかには、胸で挟んでこすりながら先っぽを舐めたり……たくさん、知らなかったことを教えてもらいましたね。

それでも、男の人っていうのは、穴に、おまんこって言うらしいですね。入れたいらしくて……でも両親に会うのは嫌だと。

両親に会ってもらえないなら入れるのはだめです、と断り続けていると、そのうちに彼とは連絡が取れなくなりました。

それ以降、卒業まで何度か学友の男性とお付き合いはしましたが、皆さん親に会ってもらえないならセックスはしないとお伝えしたらすぐに離れて行って。結局、経験した人数は一人だけ、最初のあの人だけです。

私自身は、セックスをしたくないというワケではないのです。気持ちいいことは好きなので、むしろ積極的に経験したいと思っていたのです。親に会ってさえいただければ許可しますのに、どうしてか皆さん嫌がられるんですよね。不思議です。

おかげで、体は気持ちいいことを求めているのに相手がいないという状態がずっと続いて、自慰行為を、オナニーを覚えてハマってしまいました。

最初は週に一回、次第に数が増えていって、二回三回……多い時期には毎日。今でも疲れ切っていないければほぼ必ずするようになってしまいましたね。平均で週に三回から五回くらいでしょうか。

回数ですが、内容も最初とは変わりました。指だけではどうしてもうまくできなくて、満足できず、道具を買って遊ぶようになりました。

友人に相談して、入門用といいますが、初心者向けといいますが。ともかく、そういうシンブルで小さい震えるおもちゃを買うことにしましたが、相談に乗っていただいた際に「そういうことは人に聞くモンじゃないの」と怒られてしまいましたね。では、ほかの人は誰かに聞かずどうやっておもちゃを選んだり、買った場所を知るのでしょうか。インターネットの販売サイト？

そんな最初のオモチャでしたが、入門用の安価なものだけあつて壊れるのも早かったですね。ちよど慣れてきて、少し物足りなくなってきた頃に壊れてしまいました。悪く言っているわけではありません。心置きなく新しい、いいもの買い替えられるようにというメーカーの心遣いだったのだと私は思います。

もちろん私は気に入ったので、同種の商品で少しいいものを買いました。振動の強度をリモコンで自由に調節できる、充電式のを。それから、男性のアレと同じ形をしたオモチャも……いいものはつくりがしっかりして壊れにくくて、でも長く使っていると慣れてきて物足りなくなつて買い替えて、と繰り返していると、気付いたら部屋の中に大人のおもちゃがいっぱい転がってる状態になつてしまつた時期もありました。

親が様子を見に来ることもあつたので慌てて整理して、お気に入りの物ものだけ残して、捨てちゃつて。残つたものも、壊れたりして捨てちゃいました。でも、一個だけ壊れずに残つているものもあります。デイルドが何本か。機械と違つて充電や電池交換もいらなし、何よりお湯につけて温めても壊れないのがいいですね。温めるとより本物の感じに近くになるのもいいです。

初体験のあの人の形と、サイズとよく似ているものもあります。昔に買って、今になつても一番のお気に入りで。

……で、結局本気で私と付き合つてくださる方がいらつしやらなかったの、大学を卒業して今に至るまで、こういつたオモチャが恋人のままです。大学を出た後は家庭とは一切関係のない会社へ就職して、今に至るのです。

——もう普通のオナニーでは満足できなくなって、こうしてカメラ越しに皆さんに見てもらうことでしか本気で気持ちよくなれない変態になってしまいました。

「以上、隙あらば自分語りでした。長い長い前置きにお付き合いくださいました方々、ありがとうございます。そろそろお集まりいただけただけ頃合いだと思えますので、皆様お待ちかねの本番とまいります。部屋もちょうどいい温度になりましたし。」

シャツの裾をまくり上げる。勿体ぶってゆっくりあげたりはせず、一息に全部めくりあげて、頭からすっぽ抜くように脱いだら、たたんでベッド横のテーブルに置く。

シャツの下に乳首が透けていたのでわかりきっていたことだが、今日はノーブラ。手から零れ落ちるようなサイズでありながら、美しい丸みを保つJカップバストが配信用4kカメラの前に、惜しげもなく曝け出される。

「今日は休日だったので一日ノーブラでした」

なごやかな笑顔を浮かべて、変態らしい言葉を吐きながら、バストの先端を隠すつややかな黒髪を背中に払いのける。色白の肌に、薄桃色の大きな乳輪と、まだ触れてもいないのにピンと勃起した乳首があらわになり、モニターの中で視聴者のコメントが乱舞する。

4kでネットに配信される己の裸体と、それに反応する人々に充足感を得て、彼女はふっと満足げに息をつく。

「皆様、さっそくたくさんさんのコメントありがとうございます。今日の配信もうまくいきそうな予感がしますね……えっと、今日の予定ですが、いつも通りおっぱいで楽しんで、そのあとは指で下を軽く触って……最後にオモチャを使って遊ぼうかなと思います。全部で一時間ほどを予定しています。配信の枠もそれくらいですし。では……ゆっくり楽しんでってくださいね」

もう一度、カメラに向かってにつこりとほほ笑む。首から上だけを見れば、純粹無垢なお嬢様。しかし首から下は股間を隠す、下着と呼ぶには少々布面積の足りない布切れ一枚だけ、しかも染みが広がりがりつつある。

巨乳を露出し、勃起した乳首を指で挟んでこね回して体を震わせる痴女。清楚な顔に不釣り合いなドスケベボディと言動が、視聴者の目を釘付けにして離さない。

「ふっ、ん……んくっ、私い、この先をいじるのが好きなんですよ♡ 皆さんっ、もうご存知だとは♡ 思います……けど」

もんで、挟んで、つまんで、転がして、引っ張って。少しずつ刺激を強くしていく。ゆっくりと、弱火でチョコレートを溶かすように。視聴者コメントで「しってた」という言葉がたくさん流れていく。コメント数が増えるにつれて、彼女の中のナニかが満たされていく。体が昂ぶっていく。

「んふ……みなさまあ、見て、くれていますか♡ わたし、見られながら気持ちよくっん！ 痛いくらい、ギュってしたら♡ すごくイインです♡ つぐ、ひィ♡」

強く、真っ赤な乳首が白くなるほど強く、指で乳首を挟み潰す。それがよほどいいのか、体をひときわ大きく震わせて、惚けた顔を視聴者に曝して、絶頂したことをわかりやすく伝える。

「あ……はあ♡ すこし、イってしまいましたね。乳首だけでイける人ってあまり居ないそうですし、もしかしたら私のおっぱいはクリトリス並に敏感なのではないでしょうか？ さす

がに言い過ぎでしょうか……『クリとどっちが敏感か確かめてほしい』？ ええ、そうするつもりです。少々お待ち下さいね、まだ始まったばかりですから、ゆっくり楽しみましょう」

カメラの角度を調節するのに身を乗り出し、重力に従って長い乳がカメラにドアップになり、配信映像が乳の肌色で埋め尽くされる。

「アームの角度と、ピントの自動調節……拡大。これで大丈夫、でしょうか？」

しばらくゴソゴソという音しか拾わなかったマイクが、ようやく声を拾って。乳まみれの画面が切り替わったと思うと、ダブルベッドの上で四つん這いになりカメラから離れていく詩織の姿が映った。

PC画面を見ながら、枕元に置いたカメラのリモコンで角度と拡大をいい感じに調整して、濡れたパンツをアップで映す。

「ほら、見えますか。私の下着……胸を触ってただけなのに、もう透けるほど濡れちゃってます」

言葉の通り、彼女の白いシルクのショーツは染み出した汁で濡れて肌に張り付き、元から生地が薄いのもあってピンク色の性器の形がくつきり透けていた。もはや下着の役割を果たしていない。

「配信前からオナニーしてたかって？ いいえ、していませんよ。見てもらいながらでない、気分が盛り上がりません。ですから、あ……これは全部、皆様に見えていただいて、興奮して濡れてしまった分なんです。」

もうほとんど見えてしまってるようなものですが……この下……見たいですか？」

直後、「みたい！」とか「もちろん！」といったコメントが画面が見えなくなるレベルで殺到した。カメラには映っていないが、それを見た彼女は少女のような笑顔を崩さないまま体を震わせ、愛液をじわりと漏らした。同じ空間に異性が居たなら、死にかけの老人でも飛び起きて押し倒して、その豊満な肢体にしゃぶりつくほどの淫臭を発していた。

「そんなお願いをされてしまつては……見せないわけにはいきませんよね」

足を広げて、ショーツのクロッチ部分と肉の間に指を引っ掛けて横へずらす。ふっくらとした陰唇に挟まれて、充血して膨らみ、わずかにはみ出した具と、同じく膨らんで皮が剥け、頭を出しているクリトリスがカメラにむかって見せつけられる。

「経験人数一人、回数一回だけ、色素の薄いピンク色の、ビラビラも小さい自慢のおまんこですよ。皆様、心ゆくまでご覧になってくださいね♡

┌

清纯派大和撫子、童顔美少女の生配信無修正マンコに、視聴者の熱はピークに達する。達しすぎてもう賢者モードに入ってしまったとコメントを残す視聴者もちらほら。

「えええ、もう出しちゃったんですか？ まだ始まったばかりなのに。候さんがたくさん居るんですね……でも、すぐに元気になりますよね？ これからもっとエッチなことを、時間がなくなるまでたーくさんするんですから。こんなところで終わってたらもったいないですよ。ほら、がんばって元気になってください♡」

視聴者に見えているのはドアップで映る女陰だけ。彼女は無邪気な笑顔のまま声援を送る。それを効いて視聴者のコメントも活気づく。

「元気になりましたか？ では、もっと元気になれるように、私も頑張りますね！」

そう言って彼女は立ち上がり、カメラの角度とズームを戻して全身が映るようにしたら、ゆっくりとショーツを下ろしていった。

股間に張り付いた布が裏返り、ゆっくりと剥がれて、透明な糸を引きながら足の間をすすると落ちていく。

脱ぎ終わったショーツを両手で広げて持ち、カメラに向ける。水をかけたようにびっしりと濡れて、液体のりを塗りたくったようにてらてらと光るそれを、視聴者に見せつける。

「私がどれだけエッチか、皆様わかっていただけましたか？ 乳首をいじってるだけでこんなに濡れてしまう変態だって、わかっていただけました？」

見られてると思うと、いっぱい溢れてきてしまうんです。今も太ももにお汁がたれてきてるんですよ、見ます？ それとも、出てきてる場所が見たいですか？」

答えのわかりきった質問を投げかけて、視聴者の声を聞く。よりも前に、ベッドの上でZ字開脚。乳に負けず劣らず豊満に実ったヒップがベッドに沈み込み、太ももの付け根、粘つく汁の出どころ、肉の割れ目、ぴっちり閉じたクツレヴァスを指二本で広げてみせた。ここで視聴者数がグンと増えて、反比例してコメントの数は減る。

「皆さんの大好きなおまんこくぱあですよ。コメントが減ってきましたね、皆様右手が忙しいんでしょうか。もっと奥が見たい？ 難しいことをおっしゃいますね……やってみますけども」

みっちり詰まった肉洞の中へ指を差し込んで、左右へかき分けるように開く。入り口だけでなく、中の肉ヒダまでしっかりと見えるように。

「中が暗くてよく見えない、そんな人のために、今日はスマートフォンを用意してあります。これのライトで照らして、自分でも見えないような場所、本当は誰にも見せちゃいけないような場所を、皆さんにだけ、特別に見せてあげますね」

汁でべとべとの手でスマートホンを操作する。濡れているせいで誤反応を起こして少々手間取ったが、LEDがついて彼女の開かれたマンコの奥を光で照らし出す。複雑な形のヒダヒダの

奥に、つるつとしたドーナツ上の肉、ポルチオ、子宮口までが丸見えになる。それを4kカメラが撮影して、インターネットで世界中に配信する。

その行為を恥ずかしいと思いつつながら、取り返しの付かないことと認識しながら……だからこそ気持ちいい。万を超える目に見られている事実には、見られているだけで興奮して、快楽を得て、白濁した本気汁が湧き出す。

「ハッ、あ……♡みて、もっと見てください♡ わたくしの、えっちなところ、おっ！」

広げたまま、ナニもせずに見られている。それだけでは満足できず、片手で膣を広げたまま、空いている右手で膣中を指でかき回し始めた。本気汁と愛液が混じって、泡立ちぐちよぐちよと音を立てる、激しいセルフ手マン。清純そうな笑顔は見る影もなく、快楽を貪るメスの顔に変わってしまったている。

「お、おっ……！ きもひ、きもちいいよおっ♡

みなさんも一緒に、気持ちよくなってくだ、さ、イツ♡ わたくひの、きもちよくなってる、ところを……見て♡」

びくんびくん、と大きく体を震わせて、指の動きが早まる。絶頂まであと少し、マンコを開いていた汗まみれの手を胸に持っけいき、乳を揉みながら乳首をいじる。「ひィッ♡」声が一  
段高くなり、呼吸も早く、短くなる。マン肉もヒクついて、絶頂まであと少しのところまで昇  
りつめて……

「んっ……！ ふっ、ふっ……ふう……はあ……もう少しで、イってしまふところでした。こ  
こまでは準備運動ですからね。準備で満足してしまつてはもつたいないですから。本番？ 本  
番はちよつと待つてくさいね」

裸のままベッドを降り、スリッパを履いて部屋の外へ出ていく。股間から垂れた汗が点々と  
床に落ちて、扉まで続いていく。バタバタとすぐに戻つてきて、その手には大きく、太いディ  
ルドが握られていた。

「この、お気に入り入りのデイルドーです。お風呂でお湯につけて温めました。温めなくても気  
持ちいいんですが、でもやっぱり温めたほうが人肌に近くなつて気持ちよさが倍増です。男性

のオナホールも多分そうですよね、時間のあるときには、楽しむための一手間を惜しんではいけませんよ。

じゃあ、入れる前にもうひと手間……♡ えろ……じゆる、じゅぶつ、じゆるる……じゅぽ、じゅつぷ……はぁ♡ これでよし」

「サイズ。チン長20センチ、太さは親指と中指で輪を作った程度。カリ高で、きゅうりじみた反りを持つ大変ご立派なデイルド。それを先から根本まで舐め回してたっぷりと唾液を塗りつけて、仕上げにディープスロート。根本まで一気に飲み込んで、吐き出して、準備完了。ではなく、今度はベッドの下から全裸の男性のマネキン、人形を持ち上げて、その股間にデイルドの吸盤をしつかりとくつつけた。

「女性用ラブドールの……名前はまだない君ですっ！ 今日届いて、早速の使用になります。『俺達よりイケメンだわ』って、そんなのは仕方ないことです。そういうふうに作られているんですから、気を落とさないでください。

でも、もし視聴者様がご自分の顔のラブドールをオーダーして、送っていただけるのなら、喜んで使わせていただきますよ。

おちんちは、このくらいないとちよつと寂しいので、ご自分のモノに自身のない方は申し訳ありませんが、ペニスなしでお願いします」

穢れを知らない少女のような、屈託のない笑顔をカメラに剥けながら、その下では豊満な裸体をさらけだして、天を衝くようにそそり立つデイルドに股をこすり付け素股している。滴る雫が早くもラブドールの腹は愛液でベタベタに汚れてしまっている。

上と下で全く違う、矛盾するような温度差に、視聴者の股間も限界を知らず固くなっていく。

「それでは、挿れてしまいますね……私のナカに、かたくて、大きいオチンチンが入ってしまうところを……皆様、しっかりと見ていてください」

むっちりとした肉厚の知りを持ち上げて、手でデイルドの位置を調節して、入り口に合わせる。快楽への期待と興奮に、カメラマイクが音を拾ってしまうほど息を荒げて、ゆっくりと腰を下ろしていく。彼女の重くはない体重がデイルドの先端にかかり、肉穴をかきわけて沈んでいく。

亀頭部分を飲み込み、カリ首まで沈んだところで、彼女は一気に尻を落とした。

「んんんんん  
ンンンンン  
——  
ツツツ  
♡♡  
」



口を抑えて、抑えきれない悲鳴を堪える。ラブドールに打ち付けられた尻肉が波打つ。膣内をゴリゴリと削りながら駆け上がり、ポルチオの下真ん中を打ち上げる力強い亀頭の感覚。待ち望んだ強烈な快感が背筋を駆け上がり、全身をめぐり、震わせる。勢いよく伸ばされた背筋に、遅れて追従した巨乳がぼるんと跳ねる。

「ふ、ふへえ……」

下品なほど緩んだ顔、気の抜けた声、時折ピクリと震える肩。股間からじわりじわりと溢れ出す潮。セルフお預けからの、「サイズデイルド一気飲みであっさりと絶頂を迎えてしまったことがよくわかる。あまりにも淫猥なその光景に、視聴者コメントには『抜いた』だの『ふう……』だの、そういったコメントが早くも溢れ出す。

流れるコメントの数だけ射精されている、男たちの頭の中でザーメンまみれにされている。彼女自身も、視聴者が目の前に居たら、代わる代わるチンコを突っ込まれて射精されて、子宮からあふれるほどに精液を注ぎ込まれて、小便のように精液を垂れ流し、シャワーのようにザーメンを浴びる妄想をして。「イッ♡」興奮して、またイッた。

「い、挿れただけでイっちゃいましたあ……♡ ちょっと、休んで、いいですかあ？」

視聴者コメントは当然『ダメに決まってるだろ』など、それに類するものばかり。『でかいケツと乳を揺らしながらイキ潮吹き散らすところが見たい』など、過激な要望も数えればキリがないほど。

「皆様、ひどいんですから♡ でも、要望に答えられないわけには、イキませんよね♡ 視聴者のみなさまは、お客さま、ですつから、あ……♡」

震える声で、震える尻を持ち上げる。ドールと密着していた肉が剥がれて、間に粘液の柱が生える。

陰唇は疑似ペニスにしゃぶりつくように吸い付き、愛液と本気汁の混合液で、褐色偽ペニスの表面を白く塗り上げる。

「ふっ、ふい……ふう♡ ひっ♡」

童顔に似合わないほどむちむちの脚が、悲鳴を上げながら巨尻を支えて、偽ベニスのカリ首まで露出させる。腰が落ちそうになるので、ドールの胸に手をつけて支えようと、また乳が揺れる。

「み、皆様……あ♡ ごらんくださいイッ、こんな、おっきいおちんぼが、私の中に♡入ってたんですよ、見られながらで、こんなに、濡れてるんです♡ おとうさま、おかあさま、わらひ、こんなはしたない大人に育って、ごめんさイッグ♡♡」

プシャ、とまた盛大に潮を噴く。両親に謝りながら、もう何度目かわからない絶頂を迎えた。カメラで撮影されている、視聴者の投稿する性欲100%のコメントを見るだけで、ろくな刺激がなくてもイッてしまえるように、自分で自分を開発してしまっている。ベルを鳴らすとよだれを垂らす犬と同じように、カメラに撮られながらコメントを見ると下の口からよだれを垂らすよう条件付してしまっている。

脚と腕でなんとか体重を支えていたのに、いった瞬間に力が抜けて、腰がすんと落ちた。抜けかけていた疑似ベニスが、膣道を逆流してくる。ゆるんだ膣肉を貫いて、先っぼがもう一度子宮口を突き上げる。ポルチオの一点で、自分の体重をすべて受ける。

「ひっ……♡　ぐっ、いっぐう……——ツ♡♡」

オナ狂いのクソザコマンコは、子宮ノック一発であっけなく追加アクメをキメてしまう。痛いほどの快楽に顔も股間も緩みきって、上の口は舌を出して涎もたらし、下の口からは小便をちよろちよろと漏れている。

育ちの家の品格など全くなく、あるのは本物のペニスと精液を欲しがり蠢く名器の品格くらいだ。

メスの本能に従いたい気持ちは中途半端に硬い貞操観念のせいで押し込まれ、仕方なくこうした歪んだ形で発散させているが、代用品では快楽の純度が足りず、満足感を得るためにこうして過激なオナニーに走っているのだ。

「ふう——ふっヴ、おおきくて、ふとくつてえ♡　きもぢ、いいのっオ♡」

連続イキの余韻が過ぎたら、またゆっくりと腰を上下に揺する。下品な声で、恥ずかしげもなく、発情した獣のように快楽を叫ぶ。

「『近所迷惑にならないの』ってえ、大丈夫れすよ……今までえ、一度も、ん……苦情は来て  
ませんから、あっあっ！」

尻が上下に動くたびに、ぬじゅ、ぬじゅっ。ぱんっぱんっとな音が鳴り、口から喘ぎ声が溢れ  
る。

「マンションの、最上階でっ、下には誰もっ、住んでないのでえ♡ 人のこと気にしないで、  
集中できるん♡ ですっ♡

おく、ぐりぐりつきもちっ♡ イキそ、イキますねっ……！！ イッ♡ いっぐ！！！」

腰を大きく振り上げて、力強く振り下ろす。子宮を潰さんばかりにデイルドへ叩きつけ、真  
っ白な首を反らして何度目かわからない絶頂を叫ぶ。

舌を突き出してふるふると震える。ドールの腹部から胸部までイキ潮やら小便やらでビショ  
濡れで、シーツにまで色々な汁が染み込んでいる。

「はあ……はあっ……♡ ちょっと、休憩……」

体を倒して、ドールの胸板に自分の胸を押し付けながら、横にごろんと転がる。ぬぽつと音を立ててデイルドが抜けたら、仰向けになり深呼吸をして、呼吸を整える。

「ふうー……見てくださいよ、このおちんちん。全部私から出たお汁なんですよ……自分で出しておいてなんですけど、エッチですね……精液まみれのおちんちんも、こんな感じなんですようか……」

落ちていた気分がまた盛り上がってきたのか、抜けたあとも閉じきららない雌穴に指を突っ込んでかき混ぜる。

先程までの激しいオナニーとは違って、とろ火で体をゆっくり温めて、熱を覚まさない程度のゆるい動きでぼんやり続けていると、喘ぎ声に気づいた視聴者がコメントを投げた。

『オナニーするならちゃんと見せてよ。オナニー配信チャンネルでしょ？』

「……ハッ、ごめんなさい、気が抜けてました。そうですね、皆様私のオナニーを見に来ていらっしやるのに、見せないなんて詐欺になっちゃいます。ほんと、ごめんなさい。それでは改めて、私のとろとろオマンコを見ていってくださいね♡」

ラブドールをベッドの端へ押しやって、カメラに向かってまたΣ字開脚。指で広げるまでもなく開きっぱなしで、膣内が丸見えになっている。

白濁した本気汁は中出しされた精液のように溢れ出し、内ももや尻だけでなく、脚の先まで濡れていた。

泉はいまだとぶとぶとわき続けており、指を止めても止まる気配はない。

それからもゆるゆると時間いっぱい、絶頂しない程度にオナニーを続けて、リスナーとのんびりした会話を楽しんだ。

「ふう……それではそろそろお時間になりますので、今日の配信はこれでお開きとなります。皆様ご視聴ありがとうございます。また次の配信でお会いしましょう」

配信を切ったら、軽く伸びをしてから後片付けに入る。使った道具とラブドールは浴室へ持ち込んで、付着した色々な汁をお湯できれいに洗い流す。ついでに自分の体も洗う。

洗ったあとはタオルで拭き上げて、除湿機をかけた乾燥部屋に入れて洗濯物と一緒に乾かす。汚れたシーツは翌日の洗濯物に回すのだ。

いいところのお嬢様ではあるが、いやだからこそ、家事は一人で全部こなせるようになって  
いる。

すべて片付けが終わったら、お気に入りのパジャマに着替えて、心地よい疲労感とともに眠  
りにつくのだった。

ノクターンノベル様にて、同タイトルで挿絵なし版が全文公開されております。